

老いと孤独に寄り添う方言

— 東日本大震災高齢被災者へのインタビュー —

櫛引祐希子
(追手門学院大学)

<要 旨>

東日本大震災の被災地の仮設住宅で生活する高齢者に、定期的におこなわれる方言を用いた慰問活動に対する感想を尋ねた。インタビューでの回答と慰問活動の参与観察の結果を手がかりにして、被災者支援における方言の機能について考察した。その結果、方言は高齢被災者の老いと孤独に二通りのかたちで寄り添うことがわかった。一つは、方言が高齢被災者の孤独を緩和するということである。これは、生活の言葉としてだけでなく娯楽品・鑑賞物という性格も有する現代の方言が呼び水となり、同じ土地の記憶を共有している人々が集まることに起因する。もう一つは、方言が高齢被災者の「思い出してなつかしむ」という行為を担保するということである。前者の孤独は社会的な孤立によるものだが、後者の孤独は私的な充足感に結びつく。だが、どちらも現代の地域社会で衰退傾向にある方言の社会的意味の変容と無関係ではない。方言が人間の対極的な孤独に寄り添えるということは、方言が高齢者の生を支える道具となりうる可能性を示唆する。

<キーワード> 老い、孤独、東日本大震災、方言、高齢被災者

【はじめに】

鴨長明の『方丈記』には、長明が生きた時代の大火、辻風、飢饉といった災害によって被災した人々の生活の様子が描かれているが、元暦2年(1185)の文治地震は、とりわけ長明にとって恐ろしい体験だったようだ。

「羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震(なみ)なりけりところ覚えはべりしか(羽がないから空を飛ぶこともできない。竜ではないから雲に乗ることもできない。恐ろしいことのなかでも、特に恐ろしいのは、やはり地震であると思った)」。長明は、地震によって逃げ場が失われることの恐ろしさをこう書き留めた。

2011年3月11日の東日本大震災で、長明のような感想を抱いた人は少なくない。時間をかけて大きさを増す揺れ。予想をはるかに超える大津波。度重なる余震。収束が見えない原発事故。逃げたくとも逃げられない状況のなかで、人々は互いを励まし支え合い、生き延びようとした。極限の状況のなかで、被災地の人々が冷静さを保ち、いかに勇敢な行動をしたかということは、震災直後のマスコミの報道を通じて国内外に広く知られることとなった。

いわゆる「災害ユートピア」と呼ばれるこの時期は、吉川(2007)によると災害過程の「緊急段階」にあたり、生命を守ることと社会機能の復旧

に人々が懸命になる時期である。その後、被災地は「応急段階」を迎える。これは、被災者が「一時的な生活を確保する段階（吉川 2007、p40）」である。この時期に仮設住宅が建設される。被災地には他地域からの支援者やマスコミなどが集まり、場合によっては災害発生前より活気を見せることもある。そして「復旧・復興段階」が訪れる。被災者への社会保障や被災地の復旧に向けての組織的な活動が軌道にのり、被災地の復興という言葉が住居の建設や産業の再建などを通じて具体的なカタチになっていく時期である。

だが、この時期は、被災者の間に格差が生まれていく時期でもある。同じ被災者として互いを支え合ってきたとしても、被災地が災害発生前のインフラを取り戻しつつあると、仕事の有無で被災者の間に経済的な格差が生まれる。また、仕事があれば自ずと社会参加の機会に恵まれ、他者との関係を構築していくことができるが、そうでなければ経済的な苦境に立たされるだけでなく、社会的な孤立を余儀なくされることとなる。

こうしたことは、生活再建が困難な高齢被災者に多く見られる。だが、そもそも高齢者は被災経験の有無とは関係なく、社会的に孤立しやすい（あるいは、すでに孤立している）存在である。石田（2011）が指摘するように、年齢による肉体的な衰えや仕事からの退出に伴う収入の減少だけでなく、「高齢」というだけで社会的弱者に位置づけられるという、ある種の不平等に高齢者はさらされているのである。

そして、高齢者が社会的に孤立しやすいということは、それに付随して孤独な状態に陥りやすいということでもある。

本来、老いと孤独は個別の問題である。年齢が若くても孤独に苛まれることはある。また、高齢

であっても孤独を感じない人はいる。だが、人は人生の時間に比例して別れの回数を重ねていく。つまり、望むと望まざるとにかかわらず、他者との関係を喪失していく回数は、年齢に応じて増えていく。それに加え、先に述べたように一定の年齢から年を重ねると、社会的に活動できる場が限定される。その結果、老いと孤独は、互いの結びつきを強固にする。

東日本大震災のような災害は、こうした老いと孤独の問題を顕在化させる。多くの高齢者が、家族や友人、財産を失い悲しみに暮れるなか、地域再生は若い世代が担うという社会的な風潮により、「復興」という言葉の陰に追いやられていった。

だが、老いはネガティブな意味合いだけを持つわけではない。年齢を重ねたからこそ、一人の人間として拓けていく可能性があることも事実である。

また、高齢者というのは、生きてきた時間のなかで様々な困難を乗り越えてきた人でもある。加藤・最相（2011）には、次のような記述がある。

高齢者というのは、必ずしも災害弱者ではないところがあるんです。長く生きてこられたので、たとえば過去に戦争や他の災害を経験されている場合があります。それが脆弱さの反対、強靱さとして残り、ストレスにもうまく対応できる能力を持ってる人たちがおられるのです。

（p59）

震災も本来は高齢者が経験した出来事の一つである。だが、問題は長い人生のなかにある幾つもの経験の一つであるはずの震災が、その高齢被災者の拓かれていくはずだった人生の可能性を狭める、あるいは人生そのものを望まない方向へ向かわせてしまうということである。

【高齢被災者と方言】

言葉という点から高齢被災者をとらえた場合、問題として浮かび上がるのは、多くの高齢被災者が使用する方言が他の世代や他地域の出身者との間にコミュニケーションギャップを引き起こすという事実である。特に東日本大震災の被災地である東北では、高齢者との世代との間で方言の使用・理解をめぐる差が著しいことが知られている。

震災後、被災地に縁のある研究者を中心に他地域からの支援者と被災者（特に高齢被災者）との間で生じたコミュニケーションギャップの解明とその解消に向けた実践的な研究がおこなわれた（岩城他 2013、今村他 2014、竹田 2012、東北大 2012 など）。こうした研究が迅速におこなえたのは、言語地理学を祖とする日本の方言研究が、日本語の地域差に関するデータを長年にわたり蓄積してきたからである。

また、東北大学方言研究センターでは、宮城県気仙沼市で活動する支援者のための方言パンフレットの作成をはじめ、震災と方言に関する研究成果の発信と収集を目的とした「東日本大震災と方言ネット」(<http://www.sinsaihougen.jp/>)を立ち上げ、被災地に所在する大学としての社会的責務を果たすかたちで研究活動をすすめている。

だが、本研究は、こうした一連の研究とは違う問題意識に基づくものである。本研究の目的を端的に言えば、方言が被災者に対してできることを明らかにするということである。

現代の方言は「思考内容の伝達という言語の本質的な機能を共通語に任せ、心理的なメッセージの提示に重心を移してきている。（小林 2007、p. xi-xii）」と考えられている。つまり、方言は、その使用者の他者に対する心理や態度などを表

明する言葉としての性格を強くしているのである。

筆者の問題意識は、こうした変容を遂げている方言は、被災者にとってどのような存在なのか、そして被災者に対してどのような働きをしているのかという点を明らかにすることである。

震災の前から、各地の方言大会や方言をテーマにした番組の人気などを通して、方言が人々の帰属意識に直結する言葉であることは一般的に認識されていた。だが、震災後の被災地や避難場所で方言を用いた慰問活動が続けられ、そこに人々が定期的集まるという事実は、方言が人々の帰属意識を強く喚起させる言葉であることをあらためて社会に知らしめた。

本研究で取り上げる宮城県名取市の市民団体「方言を語り残そう会」（平均年齢 74 歳 2007 年に発足）は、自らも被災者でありながら震災直後から被災者支援の活動を続けている。会の活動は大きく二つに分けられる。

①方言の継承を目的とした活動

②方言による被災者支援に関わる活動

①は震災以前から続けられている小学校での方言による民話の語り、方言カルタの制作、地元の昔話を方言に翻訳する作業、共通語引きの方言集の作成などである。②は震災をきっかけに始めた活動である。地元開設された美田園第一仮設住宅^注への定期的な慰問、方言による震災句集・詩集の作成などがある。

「方言を語り残そう会」の②の活動に注目した今までの研究は、主に支援者の側（つまり、「方言を語り残そう会」）から被災者支援における方言の役割を考察してきた。たとえば、魏（2012）は「地域の人々が精神的な復興を果たすためには、方言の果たす役割が大きい」という見解を示した。

また、櫛引（2013）では被災者支援に方言が用いられるという事実が「方言に慣れ親しんだ人（＝高齢被災者）が、ここで生活している／支援を必要としている」というメッセージを社会に発信しているということを指摘した。

しかし、こうした考察には支援を受ける側（つまり、仮設住宅の住民）の視点が反映されていない。その理由は研究者によって様々だろうが、筆者の場合は二つある。

一つは、社会調査に疲弊している被災者の負担、いわゆる「調査災害」を軽減するためである。震災後の被災地では社会調査が大量におこなわれ、社会調査が被災者の疲弊を招くことが知られている（大矢根・渥美 2007）。

もう一つは、筆者が仮設住宅の住民に向き合うための時間を必要としたということである。筆者は 2012 年 2 月から「方言を語り残そう会」の活動取材するために、会とともに定期的に美田園第一仮設住宅を訪れ、住民との交流をはかってきたが、「方言を語り残そう会」の関係者として仮設住宅の住民と接するように努めた。調査者と被調査者という関係を築いてしまうことで、「方言を語り残そう会」の慰問活動に対する仮設住宅の住民の自然な反応が観察できなくなることを避けるためである。

2012 年から美田園第一仮設住宅で定期的におこなわれる「方言を語り残そう会」の慰問活動の参与観察を続けるなかで筆者が感じたのは、方言は老いと孤独に寄り添うということであった。つまり、本研究のタイトルである「老いと孤独に寄り添う方言」は、筆者の実感に端を発するものである。

しかし、これはあくまで観察者としての筆者の実感であり、支援を受ける当事者の実感は不明で

あった。方言が老いと孤独に寄り添うとは、どういうことか。支援を受ける側の視点を反映させるかたちで、この点を明らかにするために、本研究では「方言を語り残そう会」の慰問活動に参加している東日本大震災の高齢被災者（60 代以上の仮設住宅の居住者）へのインタビューと慰問活動の参与観察を実施した。

【調査概要】

調査概要は、以下の通りである。

調査実施日：2015 年 9 月 26 日、11 月 27、28 日、2016 年 1 月 23 日、3 月 5 日、5 月 27、28 日

調査内容：美田園第一仮設住宅で地元の市民団体「方言を語り残そう会」による方言を用いた慰問活動（平均年齢 74 歳、10 名前後のメンバーが関わる）を見学し、活動の様子を映像で記録。

並行して、高齢被災者 8 名（女性 64 歳、74 歳、76 歳、79 歳、87 歳、89 歳、90 歳の計 7 名と男性 75 歳の 1 名）にインタビューを実施。インタビューは、話者の希望や当日の会場の事情などに応じて一人につき 15 分から 1 時間程度。11 月 27 日に実施した女性 3 名（64 歳、87 歳、90 歳）のインタビュー調査は映像で記録（2 名は同時撮影）。また、2015 年 11 月 27 日と 2016 年 5 月 27 日には、名取市社会福祉協議会の生活支援相談員 2 名に仮設住宅の住民の生活や慰問活動に関するインタビューを 1 時間実施。

なお、慰問活動を記録した映像は、今後「せんだいメディアテーク『3 が つ 1 1 にちをわすれないためにセンター』」の HP で公開を予定している。

【調査結果】

インタビューした8名から聞かれたのは、震災が起きた2011年7月から「方言を語り残そう会」が継続的に慰問活動を行っていることへの二通りの感謝である。

(1) 方言による昔話の語りや体操、歌などを通して楽しませてくれることへの感謝

(2) 継続的に慰問することで生活に変化(特に人間関係)をもたらしてくれることへの感謝

以下、この二つの感謝を軸に調査結果について詳しく述べていくことにする。

1. 楽しませてくれることへの感謝

(1) は、方言が高齢被災者にとって生活の言葉としてだけでなく、娯楽品・鑑賞物へと変容していることを物語る。方言絵手紙の作成(9月26日に実施。下の写真は説明風景)や方言で進行するカラオケ大会(3月5日実施)といったイベントを「方言を語り残そう会」が企画し、多くの高齢被災者が参加する背景には、方言のこうした社会的意味の変容が関わる。



＜方言絵手紙の説明風景＞

だが、これは大概的に見た場合であり、個々に見れば高齢者にとっての方言は一様ではない。

たとえば、インタビューに応じた一人は、「方言を語り残そう会」が方言を使って慰問することをどのように感じるかという質問の意味がなかなか理解できない様子だった。方言は昔から自分

が使ってきた言葉だから取り立てて感じることはない、というのが理由である。つまり、慰問であろうとなかろうと地元の知り合いが方言を使うことは特に珍しいことではないというのである。この住民は、参加者のなかでも特に方言をよく使用する人物であり、その様子からしてもこの回答は納得のいくものである。この住民にとって方言は生活の言葉であり、方言を慰問活動で積極的に使う「方言を語り残そう会」は親近感を感じさせる支援者だが、少なくともこの住民にとって方言は娯楽や鑑賞の対象ではない。

また、インタビューに応じた住民のなかからは「実は耳がよく聞こえない」「実は方言の意味がわからない」という回答も聞かれた。「方言を語り残そう会」は、故郷の言葉である方言を通して仮設の住民が少しでもリラックスできるようにと慰問活動を行っているが、実はその活動の核となる方言が一部の住民には届いていなかったということである。

けれども、高齢被災者を相手にするとき、こうしたことは十分想定される。年齢を重ねることは身体的に衰えていくことでもあるからだ。また、そうなることで長年住んだ場所を離れ、他地域に住む子どもと同居するようになる高齢者も少なくはない。現に「方言の意味がわからない」と回答した住民は東京出身である。

高齢被災者と一括りにしても、このように方言に対する思いや理解は人それぞれである。

では、実際に「方言を語り残そう会」は、どのような方言を使って慰問活動を展開しているのだろうか。

「方言を語り残そう会」が慰問活動において方言を用いるのは、情緒豊かな雰囲気作りを目指してのことである。小林(1996、2007)の言葉を借

りれば、「同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認」をおこない、「その場の会話を気どらないくだけたものにしたいたいという意思表示」をおこなう現代の方言の機能を効果的に利用しているとも言える。

たとえば、2016年3月5日（土）に仮設住宅でおこなわれた仮装カラオケ大会（仮装した住民が歌を披露）で司会を担当したメンバーのIさんは、歌い手である住民とその歌の紹介をするときは基本的に共通語で話すが、住民が歌う直前や歌い終えた後のコメントでは方言を使うことが多い。下に挙げたのは、Iさんの発話例である。太字のゴシック体がIさんが発話で使用した方言である。

▼「なかなかすごいっちゃね」

終助詞「いっちゃ」は、自分が思っていることを伝え、それを相手（仮装カラオケ大会の観衆）も同じように思っていることを確認する働きを果たしている。

▼「あんやーいがったね」

「あんやー」は感動詞である。「いがった」は「良かった」を意味し、「が」は語中のカ行音が有声化したものである。

▼「こんなごとでもねえと、あがいいしょ着ねえがらね」

二回登場する「ねえ」は、否定の助動詞「ない[nai]」の連母音[a]と[i]が融合して[e:]になったものである。また、この発話でも語中のカ行音の有声化が確認される。「あがいいしょ」は晴れ着を意味するが、この時の歌い手は赤いドレスを着ていた。仮装大会でもない赤いドレスのような晴れ着は着ないという意味のコメントであり、「あがいいしょ」は掛詞になっている。

▼「○○ちゃん、今日（ちょう）のための、このドレスイ、東京（とうちょう）からお取り寄せ？」

口蓋化によって「き」の子音[k]が[kʰ]となり、「き」と「ち」の中間的な音になる。また、中舌化によって「ス[su]」が「シ[ʃi]」との中間音「スイ[sɨ]」のように発音される。

▼「あら、あんまりめんこくて、カメラ、びっくりしたって」

これは仮装カラオケ大会の記念撮影時にカメラがうまく作動しなかったことに対する発言である。「めんこい」は「かわいい」という意味の方言である。

このように、仮装カラオケ大会の場の雰囲気盛り上げ、歌い手の緊張をほぐす目的で方言が使用されている。

慰問活動をおこなう場の情緒性を高め、参加している住民との心的距離を縮めることを目的とした方言の使用は、毎回慰問活動の冒頭でおこなわれる「方言を語り残そう会」の代表Kさんの発話にも見られる。次にあげるのは、2016年5月28日のKさんの挨拶である。

▼「おはようござりす。なんかね、28年度も、さっきIさんからお話あったようにね、生協さんと一緒にまたやりたいなあと思ったんだけども、いいべか。奇数の月ね。奇数の月。5月、7月、9月、11月、1月、3月と6回おじゃまさせていただきます。その間（かん）にね、いろんな楽しい行事を計画したいなあと思ってますのでね、大いに楽しみにしてけさいん。」

慰問活動が「おはようござりす（おはようございます）」という方言の挨拶と「楽しみにしてけさいん（楽しみにしてください）」という方言による依頼表現を用いて始まるのは、「方言を語り残そう会」が方言を介して、この場を和やかな雰囲気を取り戻すものにしてしようとしていることを象徴的に示している。また、「いいべか」の終

助詞「べ」は、相手（慰問活動に参加している仮設住宅の住民）に同意を要求する働きをしている。ここで終助詞「べ」が用いられたのは、自分たちが「宮城生協仙南ボランティアセンター」の有志とともに仮設住宅での慰問活動を続けることに対して、住民にプレッシャーを与えずに許可を求めるためであったと考えられる。しかし、代表のKさんは方言しか使えない人物ではない。今年度の訪問月と訪問回数を説明する場合は共通語を使用している。これは、正確な情報を相手に伝達することを目的とした使用である。また、訪問の了解を住民に請う時も、「おじゃまさせていただきます」という使役と謙譲が入った非常に改まりの強い共通語の表現を使っている。

このようにKさんは、共通語と方言を、その目的に応じて巧みに使い分けている。方言と共通語が地域社会において併用される現代だからこそこの使い分けと言えるだろう。

2. 生活に変化をもたらしてくれることへの感謝

次に(2)の「継続的に慰問することで生活に変化（特に人間関係）をもたらしてくれることへの感謝」について見てみたい。これは、継続的な慰問活動が仮設住宅で暮らす人々の関係の悪化を防ぐ一定の働きをしていることを示唆する。ある住民は「方言を語り残そう会」を「外からの空気」に喩える。また、別の住人は「方言を語り残そう会」のメンバーと言葉を交わすだけで元気が出ると言う。

これは仮設住宅というコミュニティにおいて「方言を語り残そう会」の慰問活動が、前田(2006)の言うところの解放型(liberated)のようなネットワークを形成する要因になっていることを物語る。解放型のネットワークとは、高齢者が家族

や地域住民との関係だけでなく、特定の地域を越え他者との交際を育んでいくネットワークのことである。

仮設住宅は、震災前に同じ地域に居住していた住民が集中して生活している点で、前田の言う地域限定型とも言える伝統型のネットワークで構成されている。これによって高齢被災者の社会的な孤立が喰いとめられていることは間違いない。だが、前田が「高齢者の社会的ネットワークは友人を中心とした解放型に合致するケースが多く、その量は豊富である(p150)」と言うように、震災以前にあったのは「地域の近隣関係や親子関係を基盤としながらも、地域を越えた友人関係を形成していく(p149)」生活であった。

しかし、被災状況や生活再建の程度の違いなどにより、今まで築いてきた友人関係の継続が個人の意思に反して困難になることが多々ある。また、仮設住宅という地域限定型のコミュニティに所属していることが、地域を越えた他者との関係の構築を物理的にも心理的にも困難にする向きもある。

こうした状況下では、「方言を語り残そう会」のような慰問活動は、その活動内容だけでなく定期的に来訪しているということ自体が大きな意味を持つようになる。なぜなら、仮設住宅の外側にいる人間として住民たちと定期的に交流することによって、解放型のネットワークを形成するきっかけを住民に与えるからである。

「方言を語り残そう会」とは直接関係はないが、住民のなかには手芸やダンスなどを通じて他の支援者と交流を深めたり、関西の出身であることから関西の支援者たちと定期的に旅行に行ったりするケースもある。

「方言を語り残そう会」の場合は、慰問活動の

後に「みやぎ生協仙南ボランティアセンター」が企画している茶話会が、住民との関係を深める場になっている。「菓子や香の物を囲んで大勢が集まる雰囲気楽しい」「楽しそうにしているみんなの顔を見るだけで良い」とインタビューで答えた住民もいた。

また、インタビューを通してわかったのは、仮設住宅の住民は「方言を語り残そう会」や「みやぎ生協仙南ボランティアセンター」に対して一方的に感謝をしているだけではなく、支援を受ける側として支援する側のために何らかの行動を意識的に心がけているという点である。

たとえば、ある住民は、「方言を語り残そう会」の慰問活動日が家族の用事と重なったことを嘆いていた。この住民は、「方言を語り残そう会」に限らず、他の団体や個人の慰問にもすすんで参加しているそうである。

また、別の住民は、料理は得意だが、「方言を語り残そう会」のメンバーの家族の差し入れを歓迎したいから、自分の料理を振る舞うことはしないと言う。自分たちのために作ってきてくれるのだから、腕比べにはしたくないというのである。

今回唯一インタビューができた男性は、男性として参加しつづける自負を語った。会の慰問活動に参加する住民が全員女性にならないように配慮しているという。また、会の慰問活動後の後片付けなどの力仕事に積極的に関わり、貴重な男手としての役割を積極的に担っている。

この男性が言うように「方言を語り残そう会」の慰問活動に定期的に参加する 15 名前後の住民は、ほとんどが女性である。しかし、これは「方言を語り残そう会」の慰問に限ったことではない。美田園第一仮設住宅に常駐している相談員によると、仮設住宅で企画されている他の慰問活動や

イベントでも女性の参加者が圧倒的だということである。男性の参加が比較的多いのは、毎月最終日曜日におこなう映画上映会（仮設住宅の集會場で主に邦画の DVD を鑑賞）だそうである。

住民たちが支援される側として何らかの行動を意識的に心がけているということは、支援のベクトルが被災者と支援者の間で双方向的であるということの意味する。しかし、これは「方言を語り残そう会」や「みやぎ生協仙南ボランティアセンター」が言う「私たちの活動は、仮設の皆さんによって支えられている」というのとは少し意味が異なる。

支援する側の言う「支えられている」の意味は、自分たちの活動を喜んでくれることが自分たちの励ましになっているというものである。「方言を語り残そう会」の代表の K さんは「みなさんから元気をもらっている」と表現する。

だが、実際には、そうした抽象的なレベルで住民たちは支援する側を支えているのではない。毎回の慰問活動に参加する、自分の料理は用意しない、貴重な男性参加者として欠席しないようにする、力仕事が必要なときの男手になる、というように、支援する側を具体的なレベルで支えているのである。

支援される側の住民が、具体的なレベルで「方言を語り残そう会」や「みやぎ生協仙南ボランティアセンター」の活動を支えているのは、彼らに慰問活動を継続してもらうためである。そして、仮設住宅に解放型のネットワークを継続させ、自分たちの日々の生活に変化を呼び込むためである。そういう意味で、住民たちのこうした意識的な心がけは、自分たちの生活のための行動だと言える。住民たちは慰問活動をただ受け入れているだけでなく、自分たちの生活に欠かせないものと

して維持していけるように能動的に行動しているのである。

【方言が老いと孤独に寄り添うということ】

住民へのインタビューを通して明らかになった二つの感謝——「楽しませてくれることへの感謝」と「生活に変化をもたらしてくれることへの感謝」——は、被災地で継続的に支援活動を行っている団体に向けられるものである。したがって、この感謝自体は、被災者支援に方言を使う意義と直接的に結びつくものではない。定期的に続く慰問活動やイベントがあれば、地域限定型を基盤とする仮設住宅のコミュニティにも解放型のネットワークは生れるだろうし、先述したように既に生まれてもいる。

では、慰問活動で用いられる方言はどのような働きをしていると考えられるのだろうか。最後にこの点について考えたい。

「方言を語り残そう会」の活動についてどう思うかと尋ねたインタビューや、慰問活動の後の茶話会で多くの住民から聞かれたのは「なつかしい」という感想であった。この感想は、方言が高齢被災者にとって懐古的な娯楽品・鑑賞物に変容していることを物語る。

多くの高齢者にとって方言は毎日の生活で使う言葉だが、定期的に訪れる「方言を語り残そう会」の慰問活動で語られる昔話の方言やイベントに盛り込まれた方言を耳にすることで、日常生活のなかにある方言は「なつかしい」言葉へと変容する。別の言い方をすれば、「方言を語り残そう会」の慰問活動を通して、方言は高齢者被災者に「なつかしい」と思える言葉として意識され、彼らに過ぎ去った時間を思い出させる。幼かった頃、嫁いでの経験、震災前の風景や生活、今は亡

き人々など、方言は高齢被災者に今とは違うかつての人生を思い出させるのである。その意味で、被災者支援で用いられる方言は、高齢被災者にとってかけがえのない思い出を触発する効果的な媒体であると言える。

「思い出してなつかしむ」という行為は、人間の内的な情態であり他者と共有できるものではない。つまり、「思い出してなつかしむ」というのは、ある意味で孤独な行為である。この点を踏まえると、本研究が考察すべき問題として設定した「方言が老いと孤独に寄り添うとは、どういうことか」には、二通りの答えがあることになる。

一つは、人々の帰属意識を喚起する言葉として方言が呼び水となり、同じ土地の記憶を共有している人々が集まることで、支援者と被災者、被災者同士の社会的関係が構築され、高齢被災者の孤独が緩和するということである。これは、関係弱者になりやすい立場にある高齢者をどのように支えるのかという問題にも繋がる。

もう一つは、「思い出してなつかしむ」という孤独な行為を方言が担保するということである。人は社会的な繋がりを求める一方で、一人になれる時間を物理的にも精神的にも必要とする。「なつかしい」という感慨に結びつく方言は、過ぎ去ったかつての生活や大切な人々を思い出すという孤独な行為に個々を導く。前者の孤独は社会的な孤立によるものだが、こちらの孤独は私的な充足感に結びつく、ある意味で幸福な孤独である。

現代の方言が人間のこうした対極的な孤独に寄り添えるということは、方言が単なる言葉としての枠を越えて高齢者の生を支える道具となりうる可能性を示唆する。仮設住宅での慰問活動で用いられている方言は、高齢者の生を支える道具としての方言の一つのかたちである。

しかし、方言がそうした可能性を持つというのは、現代社会における方言の社会的意味の変容と無関係ではない。方言が唯一の言葉として地域社会で使われることが当然であった時代ならば、方言が呼び水となって人々を集め、方言を通して高齢者がかつての生活を「思い出してなつかしむ」ということはありえない。方言が衰退しているという事実が、方言に今までになかった機能を担わせているのである。

従来の方言研究では、高齢者と方言の問題について世代差の観点からコミュニケーションギャップの実態解明とその解消を目指す研究が多かったが、高齢者と方言の問題は、それだけに留まるものではない。結論として述べたように、方言は高齢者の生を支える道具にもなりうる。今後は、こうした視点からも方言の社会的な機能について考察する研究が待たれる。

注 2011年の開設当初は120世帯、2016年5月の時点で96世帯が入居。2016年3月に第二仮設住宅が閉じたことで、2015年11月の86世帯から10世帯が加わった。震災の大津波で甚大な被害を受けた閑上地区の住民が居住している。名取市内で高齢被災者の割合が最も多い(60代以上が50%以上入居)仮設住宅である。

【引用文献】

石田光規 (2011) 『孤立の社会学—無縁社会の処方箋—』勁草書房
今村かほる・岩城裕之・武田拓・日高貢一郎・友定賢治 (2014) 「災害時の医療・福祉現場における方言の問題と支援—東日本大震災から学ぶ減災のための方言支援ツール—」『第34回社会言語科学会発表論文集』社会言語科学会

岩城裕之・今村かほる・武田拓・友定賢治・日高貢一郎 (2013) 「災害時・減災のための方言支援ツールの開発」『第97回日本方言研究会発表原稿集』日本方言研究会
大矢根淳・渥美公秀 (2007) 「災害社会学における研究実践」大矢根淳・浦野正樹・田中淳・吉井博明編『シリーズ災害と社会1 災害社会学入門』弘文堂
加藤寛・最相葉月 (2011) 『心のケア 阪神・淡路大震災から東北へ』講談社現代新書
魏ふみ子 (2012) 「方言は被災者を支えることができるか」東北大学方言研究センター『方言を救う、方言で救う3・11被災地からの提言』ひつじ書房
櫛引祐希子 (2013) 「方言による支援活動」『国語学研究52』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
小林隆 (1996) 「現代方言の位置」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院
小林隆 (2007) 「方言機能論への誘い」『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店
竹田晃子 (2012) 『東北方言オノマトペ用例集』国立国語研究所
東北大学方言研究センター (2012) 『方言を救う、方言で救う3・11被災地からの提言』ひつじ書房
前田信彦 (2006) 『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク—』ミネルヴァ書房
吉川忠寛 (2007) 「復旧・復興の諸類型」浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛編『シリーズ災害と社会2 復興コミュニティ入門』弘文堂